

マルクスの前進、エンゲルスの苦闘、現代の課題

—不破哲三『「資本論」完成の道程を探る』を読んで—

石川康宏（神戸女学院大教授）

本書には『資本論』の形成過程とマルクスの理論的發展を精力的に究明する著者の最新の論稿三編が収められている。第一は「『資本論』編集の歴史から見た新版の意義」、第二は「エンゲルス書簡から『資本論』続巻の編集過程を探索する」、第三は「マルクス研究 恐慌論展開の歴史を探って」である。

本書全体の「序論的な位置」を占める第一論稿は、1「『資本論』の歴史をふりかえる」、2「エンゲルスの編集史と後継者の責任」、3「現行版の編集上の問題点」、4「そのほかの一連の問題」、5「新版『資本論』刊行の歴史的な意義」という構成になっており、つづく第二論稿がここでの「2」を、第三論稿が「資本主義の『必然的没落』と恐慌の運動論」を内容とする「3」を、それぞれの角度から深く掘り下げるという関係になっている。

■世界に前例のない新版『資本論』の意義

第一論稿が主題としている新版『資本論』の改訂は、著者が所長を務める日本共産党中央委員会社会科学研究所によって行なわれた。その作業の内容を新版『資本論』の「凡例」は「『資本論』諸草稿の刊行と研究の発展をふまえ、エンゲルスによる編集上の問題点も検討し、訳文、訳語、訳注の全体にわたる改訂を行なった」とまとめている。重要なポイントは、改訂作業の主眼が、翻訳をより厳密なものとし、いまある『資本論』をより正確に理解できるようにするだけでなく、根本的な問題としてエンゲルスによる第二・三部の編集の適否を検討し、くい違いが確認される箇所については、マルクス自身の文章や訳注などでこれを是正する点におかれていることである。そのような意味で今回の『資本論』は、訳文を新たにする新訳にとどまらず、内容そのものを新たにした新版となっている。

より詳しく見れば、マルクス自身が仕上げた第一部については、初版（一八六七年）から第四版（一八九〇年）にいたるマルクスとエンゲルスによる主な改訂箇所を明示すること、また従来不統一のあった重要ないくつかの訳語を統一することが中心とされている。

しかし、マルクス亡き後に、エンゲルスが編集した第二部以降となると改訂の内容は大きく変わってくる。第二部では、初版（一八八五年）と第二版（一八九三年）の異動だけではなく、エンゲルスによる追記や加筆、編集の問題点などが細かく検討され、またマルクスによる探求と失敗の繰り返しがそのまま収録された拡大再生産論については、マルクスの研究の経過がわかるように注がつけられており、さらに第三篇と第二部全体を補足するものとして、マルクスの第二部第一草稿に含まれながらエンゲルスによって活用されることのなかった、新しい恐慌論の訳文が収録されている。

第三部の草稿は『資本論』の中で執筆の時期が一番早いもので、必ずしもすべてがマルク

スによる研究の到達点を反映したものではない。ここでは利潤率の低下法則の意義づけや資本主義の必然的没落論など、第一・二部の執筆時にはすでに乗り越えられていた見解の残存が指摘され、マルクスの研究とエンゲルスによる編集のずれやエンゲルスの書き込みなどが詳しく検討される。第五篇の信用論では『資本論』の草稿ではないマルクスの文章の混入が明示され、三位一体的定式の章については、エンゲルスが読み違えた原稿の配列をマルクスの草稿のとおりにもどしている。

さらに全三部に渡り、マルクスの研究の発展史と関連する歴史的事項についての訳注が大幅に拡充されている。

第一論稿は、これらの内容をわかりやすく紹介し、マルクスによる研究の発展史、エンゲルスの苦闘の内容など、今回の改訂の課題が後世に残されるにいたった歴史の経過と、この作業に世界で初めて挑んだ新版『資本論』の歴史的な意義を語る。論稿の末尾に登場するマルクス等の「事業の継承者としての責任」という言葉は重く、これを形にまとめた著者等の研究の積み上げには敬意を表するほかはない。

■エンゲルスによる最善の努力の跡を追う

著者はエンゲルスによる『資本論』編集の歴史的限界を厳格に指摘しているが、それはエンゲルスの功績と努力を軽んじてのことではない。第一論稿は、その「困難をきわめた歴史的条件のもとで、(エンゲルスは)最善を尽くした」と述べており、まえがきでは「科学的社会主義の理論の形成と発展のなかでエンゲルスが果たしたかけがえのない役割とその貢献の大きさを、あらためて痛感させられる」とも述べている。その努力と貢献の跡を、エンゲルス自身の書簡を主役に解説したのが第二論稿である。

構成は、1「マルクスの諸草稿発見」、2「最初の発病」、3「『家族、私有財産および国家の起源』の執筆」、4「第二部の編集経過を見る」、5「第二部の編集内容と作業結果」、6「第一草稿と恐慌の運動論」、7「第三部草稿の口述筆記。眼病の苦悩」、8「第三部の編集に取り組む(一)第一篇から第四篇まで」、9「中間の時期に」、10「第三部の編集に取り組む(二)最大の難関・第五篇への挑戦」、11「第三部の編集に取り組む(三)最大の難関・第五篇への挑戦(つづき)」、12「『資本論』第三部、ついに完成へ」となっている。

[第二・三部の草稿の発見]

一八八三年三月一四日にマルクスが亡くなり、直後の四月にたくさんの草稿を見つけるところから、エンゲルスによる『資本論』第二・三部編集の歴史は開始される。この時、すでにエンゲルスは六三歳である。長年の苦労もあれば無理もあり、若い頃のキツネ狩りで馬もろとも倒れて負ったという大きなケガの後遺症もあった。おまけに仕事をする部屋や机にいまのように明るい照明があったわけでもない。右の諸項目に「発病」「眼病」といった言葉が見えるのは何も不思議なことではない。時々事情が見える書簡の一部を紹介しておきたい。

「『資本の流通』と第三部『総過程の総姿容』との草稿を見つけました」「この草稿が現在のままの状態です印刷に出せるかどうか、を今から言うことは、不可能です。どのみち私はそれを清書しなければならない」（一八八三年四月二日）。

「私は、過去六か月のあいだ活動不能の状態におかれ、いまようやく、亡友マルクスの遺稿を印刷にまわす準備をするというもっとも緊急な任務を果たすのに必要な体力を、徐々に回復しつつある」（一八八四年一月二六―二八日）。

この直後に、エンゲルスはマルクスの遺言だとして、モーガン『古代社会』に関するマルクスのノートを使い一八八四年三月末から五月末までの二カ月で『家族、私有財産および国家の起源』を書き上げる。

「復活祭このかた（『起源』の執筆の頃から――石川）、僕は猛烈にはたらいで、日に八時間から一〇時間も机に向かっていることがめずらしくなかったが、そのためにとった姿勢のおかげで、古い疾患が部分的に…ぶりかえしてしまった」「机に向かっすわることが、若干の例外を除いて、また禁じられてしまった」「原稿を口述筆記させるためにアイゼンガルトを雇って、今週のはじめから日に一〇時間ないし五時間彼といっしょに奮闘している」「手稿の大部分は…僕が毎晩口述筆記に手を入れなければならないような状態」（一八八四年六月二日）。

こうして病苦と闘いながら、エンゲルスは口述筆記の開始から八カ月で『資本論』第二部の編集を完了する。最後の原稿を印刷所に送ったのは、一八八五年二月二三日のことだった。

[第三部の編集へ]

作業はただちに第三部に進み、口述筆記は四カ月ほどで終わっていく。「第三巻の原稿は、やれるかぎり、口述筆記をすませた」「この秋には最終編集にとりかかることになる」（一八八五年七月二四日）。

しかし「フォイエルバッハ論」の執筆や、マルクスと自身の本の各国語版の点検など、エンゲルスには常に多くの避けられない仕事が増え込んでくる。これらにこたえる努力が次の段階では眼の不調に集中的に現われてしまう。

「やっと僕の眼もいくらかよくなっているが」「書くのは日中、明るいときにしかできず、それもぶっ続けというわけにはいかない」（一八八七年一月二八日）。「第三巻を完成するために急がなければならない」「（しかし）僕は自分の眼をまだ大事にしなければならないというしまつ」（一八八八年一月七日）。

結局、作業が再開できたのは、口述筆記が終わって三年以上がたつたのこととなる。『資本論』第三巻に取り組んでいる。僕は眼をまだたいへんたいせつにして、一日に二時間以上はものを書かないように（しなければならない――石川）」（一八八八年一〇月二五日）。

その後は、一八八九年七月の第二インターナショナル創設に向けた取り組み、一八九一年一―二月にドイツ社会民主党の新綱領策定にかかわってマルクス「ゴータ綱領批判」を公

表するなどの活動、さらに一八九二年八月から九月にかけての病気の再発もはさみながら第三部の編集は進められる。一八九九年二月に第四篇までを終わらせた後四年の時を費やして、ついにエンゲルスは最大の難関となった第五篇の編集を終わらせた。

「いまや私は——すこしばかりの形式上の事柄を除いて——第五篇（銀行と信用）の編集を終わりました」（一八九三年二月二四日）。

そして、翌一八九四年四—五月エンゲルスはついに第三部全体の編集を完了する。一体どれほどの喜びであったことか。

「たったいま町から帰ったばかりです。僕たちは第三巻の原稿の最後のものを発送しに行ってきた」（一八九四年五月一日）。

一八九四年一二月に第三部の刊行を見届けた後、エンゲルスが食道ガンによって七四年の生涯を閉じたのは一八九五年八月のことだった。著者は第一論稿で「エンゲルスは『資本論』に命をささげたとってもよい」と述べ、第二論稿では「エンゲルスの努力には、深く感動を覚える」と書いている。

第二論稿に紹介されたたくさんの書簡は、決して重い空気に満たされたものではない。しかし、文面の向こうに満身創痍のエンゲルスの姿を思い浮かべれば、壮絶という言葉も自然に浮かんでくるように思う。

■エンゲルスに読み取れなかった恐慌論の大転換

このようなエンゲルスならではの知性と労苦によって初めてわれわれに手渡された第二・三部だが、それでもいくつかの歴史的制約は免れなかった。最大の問題は、第二部第一草稿に残された恐慌の運動論とそれによるマルクスの理論転換の重大な意義を汲み取ることができなかったことである。その結果『資本論』第三部の前半に、この運動論を発見する以前の古い資本主義没落論が残され、第一部の新しい没落論との間に齟齬が生み出された。他方で、新しい恐慌論が本格的には『資本論』のどこにも展開されないままとなった。

そうした制約が生み出される諸事情を、第一論稿は、マルクスが研究の到達をエンゲルスに伝えていなかった、残された草稿が『資本論』第一部と同じ水準にあると思われた、『一八五七—一五八年草稿』『一八六一—一六三年草稿』などの内容を編集に活かすゆとりがなかった、そしてエンゲルスに体調の困難があったこととまとめている。第三論稿は、そうしてエンゲルスが読み取ることのできなかった新しい恐慌論の内容を、マルクスの恐慌論史の中にあらためて位置づけるものとなっている。

構成は、1「出発点。革命と恐慌の関連に注目する」、2「恐慌論探求の第一段階——利潤率低下の法則に根拠を求めて」、3「恐慌の運動論の発見——一八六五年の大転換」、4「『資本論』第一部（一八六七年）とそれ以後」、5「恐慌論を『資本論』のどこで展開するか——第二部の諸草稿をめぐって」となっている。

一八四七年の恐慌につづいて勃発した四八年革命の総括を深める中で、マルクスは、革命は恐慌につづいてのみ起こると言明し、待望の恐慌の発生と同時に執筆を開始した『一

八五七一五八年草稿』で、恐慌が起こる仕組みの究明に挑んでいく。

ここでマルクスは可変資本に対する不変資本の比率の増大が利潤率の低下をもたらすと
して、リカードを悩ませた難問を解決する一方、この低下に資本主義の危機を見たりカー
ドの着眼を受け継いで、これを資本主義没落の必然性論の根拠とし、その中に恐慌を組み
入れようとする。しかしその論証には成功せず、つづく『一八六一—一六三年草稿』でも、一
八六四年の第三部第一～三篇草稿でも、恐慌の根拠を利潤率の低下に求める試みは成功し
ない。

その後、この構想を転換させたのは、一八六五年の第二部第一草稿における恐慌の運動
論の発見だった。恐慌にいたる莫大な過剰生産を生み出すのは商業資本による「架空の需
要」の形成で、それをマルクスは第三部第四篇の商人資本論でさらに詳しく展開していく。
また第五篇では恐慌を資本主義がその中で運動する「産業循環」の一局面と位置づけな
おしする。もはや恐慌は革命を引き起こす資本主義の危機の現われではなくなった。こ
こにマルクス恐慌論の大転換がある。

一八六五年後半に第三部草稿を最後の第七篇まで書き上げて、マルクスは一八六六年一
月から、それまでの草稿を大幅に書き換える第一部の清書稿に取り組んだ。一八六七年九
月刊行の『資本論』第一部は、商品生産に含まれる恐慌の可能性、恐慌をその一局面とし
る産業循環、産業循環が労働者にもたらす歴史的運命などを語り、加えて資本主義没落の必
然性論として、新たに労働者階級の発達論を議論の中心にすえていく。

このような恐慌発生のおそきを『資本論』のどこに書いていくべきか。マルクスはそれを
第二部第三篇と特定していた。そのことは一八六八年春から七〇年半ばにかけて書かれた
第二部第二草稿に記されている。その後六年の空白をおいて、一八七六年に第二部第五草
稿に取りかかったマルクスは、一一年前に書いた第一草稿の運動論をあらためて書き写し、
それに補足も加えていく。さらに一八七七年から八一年に書いた、第二部第三篇のもとと
なる第七・八草稿では、産業諸部門間の均衡条件の破綻が生み出す恐慌という新たな論点
を示しする。

だが、これらの論点をふくんだ恐慌論の全体を第三篇後半で展開する前に、一八八一年
三月、マルクスは病気のために『資本論』草稿の執筆を終えてしまう。

著者は、こうしてマルクス恐慌論の歴史と到達をふりかえり、恐慌の可能性論、根拠論、
運動論を概括しながら、『資本論』の中ではこの箇所でのみ展開されるはずだった恐慌の運
動論についてこう述べている。「架空の需要」「流通過程の短縮」にもとづく生産部門一般の
問題と、異なる産業諸部門間の均衡条件の破綻にもとづく研究と、この「運動論の二つの領
域を含め、マルクスの恐慌理論の全体を具体的に総括する仕事は、マルクスの理論活動を受
け継ぐ後世の学徒が担うべき重要な課題の一つとすべきではないか」。新版『資本論』の
もっとも重要な理論の前進点は、同時にさらなる高みを求める研究の出発点になるともい
うのである。広く読まれ、検討されるべき著作である。

本書で十分に述べられていない恐慌論の大転換と「資本主義の『必然的没落』」論の関連

については、同じ著者の『マルクス 弁証法観の進化を探る』（新日本出版社、二〇二〇年）に収められた「発展と没落の弁証法——『肯定的理解』と『必然的没落の理解』」をあわせてお勧めしておきたい。

（いしかわ・やすひろ）